

若者カルチャーからの学びと犯罪予防（3）

－スケートパークの整備と観察調査－

小 関 慶 太 小 松 仁 美

Learning from Youth Culture and Crime Prevention Part.3
: Development and observation of skate parks

KOSEKI, keita KOMATSU, hitomi

キーワード： スケートボード スケートパーク 若者カルチャー スポーツと法

Keyword: skate board, skate park, young culture, sports and law

I はじめに

「若者カルチャーからの学びと犯罪予防（1）」¹では、スケートボードをめぐる法律や条例から、板に4つの車輪がついているという非常に簡単な構造の玩具であるスケートボードにはブレーキがなく、道路上を滑走しても自他ともに安全であることを示すことが難しいことから、禁止が先行されるのではないかと考察が得られた。ただし、滑走については道路交通法第76条4項3号では「交通のひんぱんな道路」でのスケートボードの使用を禁止していることから、解釈の曖昧さが含まれており、厳格な禁止事項ではなく、危険であることを前提としつつもスケートボードの利用者に注意の喚起と自由があり、犯罪化を避けようと解することも可能である²。「若者カルチャーからの学びと犯罪予防（2）」³では、量的調査結果（小関・小松調査：2021）よりスケートボードパークの不足問題と利用者マナーに対して公権力の介入に伴い犯罪化することで公序良俗違反を減らし、公共の場の秩序を保つことができるか検討を試みた。

スケートボードは、特に子どもにおいては、移動の手段に限られ、かつ低年齢であればあるほど、法律や条例についての理解・周知が十分に保障されていないなか、意図せざる形で知らず知らずに法律や条例を破ってしまうことが喫緊の課題となる。この背景として子どもの遊び/スポーツ環境としてスケートボード施設が不足していることについて触れてきた。安全な環境で滑走技術を身に付け、社会のルールを学びながら社会の一員として育っていけるよう教育的な観点からの保障を行うために、今、パークやスケートボード環境が求められていることについて探索的に検討したい。

¹ 小関慶太・小松仁美「若者カルチャーからの学びと犯罪予防（1）－スケートボード利用者への量的調査より」『八洲論叢（1）』（2021.9）

² 前掲小関・小松（2021）

³ 小関慶太・小松仁美「若者カルチャーからの学びと犯罪予防（2）－マナー、社会秩序と規範」『八洲学園大学論叢（18）』（2022.3）

II スケートボードの遊技施設としてのスケートパーク

(1) 基礎統計に見るスケートパークの少なさ

子どもがスポーツや遊びとしてスケートボードを開始するにあたって、最も大きな課題の一つは、身近に安全に滑走できる場所がないことである。

スポーツ庁の『平成30年度体育・スポーツ施設現況調査結果の概要』によると（図表1）、スケートボード場は調査の対象となっていない。しかし、スケートボードはローラースポーツに分類されており、全てではないもののローラースケート・インラインスケート場のなかにはスケートボードやBMXなどと共用する競技場が含まれる。このことから、図表1の26と27の一部に、スケートボードが滑走可能な施設が含まれると推測される。特に、屋外施設においては共有施設が多分に含まれよう。ローラースポーツ施設は2018年時点で、屋内外合わせて106施設で、屋外施設全96施設のうち、90施設が公設で、4施設が民間、2施設が高等学校等附属である。屋内施設全9施設のうち、2施設が公設で、7施設が民間である。

同調査において野球場・ソフトボール場が全8,806施設（うち公設が6,561施設）、屋内外のアイススケート場が全216施設（うち公設が142施設）、学校設備を除く公設の屋内外のプールが3,586施設、公設の屋内外のテニス場が5,294施設である。他の競技と比較すると圧倒的に施設数そのものが少ないといえよう。

図表1 平成30年度体育・スポーツ施設現況調査結果の概要の一部抜粋

体育・スポーツ施設		総数	学校体育・スポーツ施設					大学・高等体育施設	公共スポーツ施設		民間スポーツ施設	
			計	小学校	中学校	高等学校等	専修・各種学校		計	公立・市町村等スポーツ施設		社会体育施設
	総数	187,184	113,054	53,072	32,904	26,876	202	6,122	51,611	4,630	46,981	16,397
1	陸上競技場	2,081	880	264	213	381	2	221	988	92	896	12
2	野球場・ソフトボール場	8,806	1,889	143	414	1,128	4	408	6,561	437	6,124	148
3	球技場	3,141	714	51	116	544	3	359	1,613	83	1,530	455
4	多目的運動場	38,173	28,957	16,925	7,582	4,416	34	615	8,425	872	7,553	176
5	水泳プール（屋内）	3,932	784	350	140	293	1	76	1,712	138	1,576	1360
6	水泳プール（屋外）	25,708	23,615	15,755	5,549	2,307	4	151	1,874	158	1,716	68
9	体育館	41,682	31,546	17,665	8,086	5,712	83	1,197	8,650	1,548	7,102	289
10	準体育館	2,832	1,562	34	530	982	16	235	798	64	734	237
11	剣道場	2,411	1,343	19	355	969	-	195	713	46	667	180
12	空手道場（防犯場）	7,298	5,995	139	3,570	2,283	3	204	1,073	132	941	26
13	空手・気功道場	610	21	-	1	20	-	104	22	-	22	463
14	バレーボール場（屋外）	644	601	47	331	221	2	25	13	4	9	5
15	庭球場（屋外）	14,773	8,247	229	4,512	3,492	14	839	5,080	405	4,675	607
16	庭球場（屋内）	583	91	5	54	32	-	6	214	22	192	272
17	バスケットボール場（屋外）	1,200	1,136	559	469	104	4	18	41	4	37	5
18	すもう場（屋外）	1,117	794	590	154	50	-	1	312	12	300	10
19	すもう場（屋内）	255	131	7	32	92	-	13	107	2	105	4
20	卓球場	1,974	1,465	138	508	815	6	142	262	7	255	105
21	弓道場	2,715	1,321	7	191	1,122	1	280	1,086	113	973	48
22	アーチェリー場	293	57	-	3	54	-	99	121	2	119	16
24	アイススケート場（屋内）	83	-	-	-	-	-	2	57	2	55	24
25	アイススケート場（屋外）	133	42	32	-	10	-	3	85	-	85	3
26	0-ラ-カ-イ(カ-カ-カ)場（屋外）	96	2	-	-	2	-	-	90	-	90	4
27	0-ラ-カ-イ(カ-カ-カ)場（屋内）	9	-	-	-	-	-	-	2	-	2	7
53	その他	5,056	161	5	30	121	5	69	3,203	76	3,127	1623

スポーツ庁『平成30年度体育・スポーツ施設現況調査結果の概要』より小松作成

(2) 競技人口に対するスケートパークの少なさ

スケートボードの競技人口は、一般社団法人日本スケートボード協会によると⁴、40万人と推定される。これに対して106施設であると考えると非常に競技人口当たりの施設が少ないといえよう。

⁴ 「よくある質問集」を参照。

競技人口の多い野球を一例にとると、笹川スポーツ財団『スポーツライフに関する調査報告書』に基づく推計において、年1回以上野球を実施する20歳以上の人口は384万人である。これにスポーツ少年団や日本中学校体育連盟(中体連)の野球人口を加算し、おおむね450万人弱である。競技人口当たりで競技施設数を比較すると、野球は、450万人に対して8,806施設となる。

野球人口に対する施設数の比率を当てはめると、スケートパークは、およそ782施設必要となる。他競技との比較とは言え、いかに整備が遅れているかがわかるであろう⁵。

(3)「急ごしらえ」されるスケートパーク

スケートパークについて最も詳細にデータを収集しているNPO法人日本スケートパーク協会によると、スケートパークは、オリンピック前の2017年では公設施設が約100施設であり⁶、2022年6月時点において約340施設まで急増した。これら増加した施設は、笠間芸術の森公園スケートパークのように数億円をかけた本格的なごく一部の専用施設を除くと、既存の公園の一部や廃プール、駐車場、テニスコートなど他施設を転用した、いわば「急ごしらえ」の施設である。

施設急増の背景には、オリンピック効果の追い風を受けながら、スケートボード競技の人気の高まりや競技人口の伸びという整備に向けたプッシュ要因が第一にあげられよう。このほかに、公園設備の老朽化と維持の困難、それらに伴う公園利用者数の減少といった都市公園行政にかかわるプル要因も関連する(太田・佐藤2020)。

スケートボードは、しない側からすると、都市の街路のそこかしこを滑走するからこそ特別な設備を必要としないように思われる。そのため、スケートパークは、老朽化した既存設備の撤去や柵・看板の設置などの簡素な対応で設営されてしまうことがある。スケーターにとっても、街路で滑走できる技術のある者からすれば、路面の整備やある程度の広さの確保などがされなくても十分に滑走でき、公式に認められた場所があれば、取り締まりなどを気にすることなく滑走できる。行政側からすれば、投下コストを最小限に抑えて、公園利用者数を増やせ、利用者の少ない公園などにスケートパークを設置すれば、市内のそこかしこで滑られることに対する騒音や事故などを減らすことが見込まれ、苦情対策にもなる。実際には街中での滑走が止まなかったとしても、対応をとったことを示すことができる。行政側にとっては、莫大な費用をかけることなく、公園利用者を増加させ、スケーターのニーズに対応し、市民のクレーム対応ができるというメリットがあるのである。

しかし、こうした消極的な理由による施設転用で開設されたパークは、設備投資が十分に行われないうえに、必ずしも競技者や遊技者ファーストとは言い難い。滑走技術をこれから習得しようとする初心者、特に子どもの遊技環境としては、適した路面やメンテナンスされたセクションなどが準備されない場合、転倒しやすく、より大きな怪我につながりやすい。さらに、十分な整備がされていないにもかかわらず開設された施設で滑走せず、市内の街路などで滑走する場合、スケーターは今まで以上に「厄介者」としてのラベルを張られるであろう。子どもが意図しない形で法や条例の違反者にされていく可能性もあろう。

一時的にパーク数が少ない状況を打開するためには、急ごしらえのパークの増加は不可欠であろうが、ある程度、面積的な広がりをもって施設数が確保されたのちには、競技者や遊技者に合った施設

⁵ ここにはスポーツ施設整備に関する予算の分配の不均衡が伺い知れよう。

⁶ この結果は、スポーツ庁の前掲資料の内容とほぼ重複する。

設備へと整備されていく必要がある。

Ⅲ 急増するスケートパークのケース・スタディ

オリンピック効果、スケーターの増加、滑走場所の少なさ、都市行政の思惑などにより、近年、既存施設を転用した急ごしらえのスケートパークが急増する現象が生じている⁷。急ごしらえの施設は競技・遊技環境としての課題、特に子どもの遊技環境として安全性に課題を残す。課題が社会全体、特に施設転用する行政担当者に共有されていないために、公的施設として急ごしらえのパークが近年、増設されてしまうのであろう。

本稿の主眼は、転用施設の課題について、明らかにすることである。刻々と増加する状況変化が激しい現状を踏まえると、ケース・スタディを通じて検討したい⁸。一地域において、スケートパークの開設状況とその利用状況などを踏まえながら、転用施設と予算を投じて整備されたスケートパークを比較し、圧倒的に不足するパークを急ごしらえすることに関して現状把握を丁寧に行うことで、計量的に意義のある研究へとつなげていく足掛かりとなる、仮説の探求ができよう。

そこで、筆者の一人である小松が在住する長野市を一つの事例地域としてとらえる。長野市は、公園におけるスケートボードを禁止しない地域であり、なおかつ、公園の一部を公設施設として開放してきた地域であることから、行政がスケートボードに対して柔軟な対応を取りうる先駆的地域事例として今後の環境整備にも期待ができる。また、在住地域を離れて頻回に調査訪問することが、感染症蔓延状況で現実的に困難であることも選定理由である。

以下では、長野市内におけるスケートボード環境を概観し、公設パークの3施設のそれぞれの特長について参与観察をベースとしながら事例検討を進め、特に急ごしらえのパークの特長を有する2施設と、予算を投じて建設したパークとの比較を通じて、急ごしらえのパークが抱える課題を探索的に調べたい。

（1）長野市内のスケートパークの概要

長野市にあるスケートパークは、2022年7月1日時点にいて4か所である。北部スポーツ・レクリエーションパーク（1,300 m²）、長野運動公園総合運動場（750 m²弱）、南長野運動公園（380 m²弱）の各アクションスポーツ広場の公設施設3か所と、民間施設のショップ併設型室内ランプパークであるスライドライン⁹である。この全4か所が、市内において滑走が明確に許可された場所となる。全施設の合計面積は、2,420 m²ほどである¹⁰。これは、長野市内のスケートボードパークの合計面積が、北部スポーツ・レクリエーションパーク内に整備されている屋内テニスコート4面分相当の屋内運動場（2,940 m²）よりも小さいことを意味する。

⁷ これは、オリンピック以前からスケーターがスポット内で清掃活動や挨拶などを通じて地元で滑り続けられるように働きかけ、仲間を募って署名活動や議員への直談判、スポーツイベントへの積極的な参加など様々な活動を地道に続けてきた結果でもある。

⁸ 専門社会調査士としての倫理に基づき、調査を実施している。国内外の大会に参戦しながらスケート技術を磨く親子スケーターとして、地域の様々なパークに訪問し、滑走するなかでパーク利用者との関係性を築きながら、研究者として参与している。

⁹ ランプエリアは66.5 m²。高さ70 cmと50 cmの2台のランプが設置されている。利用料は1時間で350円、2時間で650円である。

¹⁰ 草野球場がおおむね8,500 m²であるからスケートボードに割かれている都市空間は非常に限定的である。長野市内には、電話帳で調べただけで17か所の野球場がある。

市の教育委員会体育課（現在のスポーツ課）によると、北部スポーツ・レクリエーションパークは、予算を計上して専用パークとして2014年に開設された施設である。後者2か所は駐車場の転用で、いずれも市の教育委員会体育課が整備に関わっている。長野運動公園総合運動場は、駐車場として利用される場所に愛好家の方々の尽力によって開設年次は明確ではないものの2000年初めころに現在の形になった。南長野運動公園は2003年か2004年ころに愛好家がセクションなどを管理するなかで駐車場の一角に柵を設ける形で整備を進めた¹¹。これら2施設が2000年代の初めに施設転用されていたことを考えると、オリンピック競技化以前の相当に早い段階から、長野市が地域のニーズに柔軟に対応してきたことが伺える。設置施設数も、面積の上でも非常に限定的で制約を受けているが、全国的に不足することを考えれば、長野市がいかに積極的に、先駆的にスケートパークの整備に向けて動いてきたかが理解できる。

2施設は少しずつ状況が異なるものの、転用という点では急ごしらえの施設の特長を有する。以下では、公的施設を一つ一つ取り上げ、課題検討を行いたい。

（2）北部スポーツ・レクリエーションパークのアクションスポーツ広場

① 施設概要

北部スポーツ・レクリエーションパーク（以下「北レク」）は、長野市北部に位置し、しなの鉄道北の信濃線の三才駅から徒歩6分の大型複合施設である。公園内には、アクションスポーツ広場のほかに、屋内運動場、運動広場、バスケットコート、芝生広場、マレットゴルフ場、ウォーキングコース、管理棟などが配置されている。ここのアクションスポーツ広場は、通称「北レク」と呼ばれ、スケートボード、BMX、インラインスケートが利用できる複数競技向けの施設である¹²。

図表2 北部スポーツ・レクリエーションパークの様子



北部スポーツ・レクリエーションパークが全体的に斜面を生かした形状となっている。
左上は、山の上部に形成されたボウルとそれを取り巻くフラット面の様子。
右上は、上部からバンク等のセクションを撮影。
左下は、バンクとカーブボックス、滑走路面の様子。きめ細やかなセメントパークであることがわかる。
(2022年7月26日、小松撮影)

¹¹ 市の教育委員会総務課およびスポーツ課に2022年8月初旬に問い合わせして、電話にて回答をいただいた。いずれも愛好家の方々にとって全く環境がない状況を解消する必要性から長年の使用経験から滑走を許容しつつ、整備が十分に進められていないこともあるために市として公式にパークとは言えない状況にある。

¹² 使用カードとチケットを窓口で渡し、受け取った腕章を返却するまで、1日中、何時間でも利用できる。1回当たりの利用料は一般300円、高校生・シルバー200円、小・中学生100円である。

このパークは図表2に示した通り、地形を生かしたダイナミックなセクションが人気である。傾斜面とフラット面との接地角度やランプのアールがやや急な、個性的なパークとなっている。

「北レク」の利用者は、スケートボードのみを行う者もいるが、大部分はスノーボードのオフトレとしてスケートボードを行う者である。オリンピック効果によってスケートボードを始めた子どもたちは少なくなく、スポーツ少年団の利用もみられる。月1回の教室にはスケートボードを始めたい子どもたちが乗り方やプッシュなどの基本を学ぶために集まる。一部の新規利用者を除くと、定期的な利用者が大部分をしめ、パーク内は緩やかに顔見知りの関係が維持されている。

② 集中する利用者と適正規模

延べ利用者数は、2020年度が4,805人、2021年度4～11月末までで5,527人に上るという¹³。年々、増加傾向にあるが、2021年度の単純に延べ人数を日数で割ると1日当たりの利用者は18人強となる。雨や雪の日は開設されないことや、平日以上に休日に利用者が集まることを鑑みると、晴れた日曜祝日の利用者数はこの倍以上になる。

「北レク」は、テニスコートのおおむね2面分の広さに、ボウルと様々なセクションが置かれるストリートパークである。そのため、チクタクやプッシュ、ブレーキングなどの基礎習得するために必要なフラット面は限定的である。基礎的な滑走技術の獲得に向けては、相応の面的広がりが必要であるが、一時的に利用者が集中する場合、安全性を担保しながら練習することは容易ではない。滑走技術のレベルに応じて滑走者同士の空間的距離や滑走時間などに変化を持たせながら利用する必要がある。

また、図表2の右上の写真で分かるように、バンク（直線斜面状の障害物）の裏に身長の高い子どもや転倒者がいる場合、その姿は「見えない」。接触事故を避けるためには、他者がバンクの影に隠れていないか、滑走以前から全体的な他の利用者の流れや行動を認識し、必要に応じて声を掛けあい、滑走開始せずに待つなどの判断が非常に重要である。

ところで、「北レク」と同規模のパークとして、千葉縣市原市にある上総更科公園内のオリプリランド（1,200㎡）があげられる。オリプリランドはフラット面を一番低い地点に集めているため、プッシュやブレーキングなどの基礎的な滑走技術の習得を目指す利用者もいる。セクションでの滑走をメインとして教えるスクールをボランティアの手を借りて実施しており、その定員は10名である¹⁴。基礎的な技術を身に付けていても、傾斜のあるストリートパークにおいて初心者が安全に滑走するには、指導に基づいて順番やタイミングなどを見計らってもらいながら、少数で滑走する。指導者の管理・監督によって安全な滑走が実現していることを考えると、各人の判断で安全管理をすれば、スクール以上に滑走人数が少ないことが理想的である。

利用者の滑走技術にもよるので、一概に規模だけでは適正な利用人数を示すことはできないものの、「北レク」では一度に5～15名程度の利用が適正であろう。もちろん、滑走は順番を待つ、連続した滑走では疲労が蓄積するので休憩をとるなどするため、一時的に利用者数がこの数を多少、上回ったとしても、入れ替わりで順序良く滑走をすれば問題はない。ただし、安全のためには、滑走の順番やタイミングなどを自身で十分に見計らえる利用者だけではないことを踏まえながら、年少者・初

¹³ 朝日新聞デジタル（2022年2月17日）を参照。

¹⁴ 上総更科公園 <https://www.kazusa-sarashina.com/>（最終閲覧日：2022.8.10）。なお、COVID-19感染症蔓延以前は定員20名であった。

心者に寛容な滑走が求められよう。

なお、どのパークにおいても、通常はスクール開催時よりも一般開放されているときのほうが利用者は多い。「北レク」では平日の夜間が10名ほど、土日祝日では利用者の多い時間帯に20～30名の老若男女が、スポーツ少年団などが加わり多い時には同時間に50名ほどのスケーターが集まることがある。

利用者が集中する背景には、時間帯や天候といった影響のほか、後述する長野運動公園総合運動場のアクションスポーツ広場が利用できないために移動して来るために利用者が増加するケース、スクール開催日、無料開放日などがあげられる。

利用人数が多いときほど、周囲に滑走者がいないかの確認や、転倒時にスケートボードが滑っていった他者に当たらないよう空間があるかなどの最低限の互いの安全への配慮が必要となるが、配慮が十分にできない初心者や子どもがより多く含まれる。安全な滑走環境とは言えない状況が生じてしまうのである。こうした状況を踏まえると、パークの増設が急がれるのである。

（3）長野運動公園総合運動場のアクションスポーツ広場

① 施設概要

長野運動公園総合運動場（以下「東和田」）は、国民体育大会や長野オリンピック・長野パラリンピックの会場となった都市公園である。しなの鉄道北の信濃線の北長野駅から徒歩20分である。運動場内には総合市民プールやトレーニングジム、テニスコート、総合体育館、弓道場、運動広場、陸上競技場、県営野球場などが整備されている。

図表3の写真は、180台分の臨時の南パーキングの北東の一角に位置する長野運動公園総合運動場のアクションスポーツ広場の様子である¹⁵。右上の写真からは「長野市教育委員会体育課」とこの駐車場を長年利用してきた愛好家が共同で開設したことが推察される¹⁶。

このアクションスポーツ広場は、地元のスケーターに「東和田」や「運動公園」と呼ばれており、利用に関する注意書きを示した看板とベンチが設置されているほかは、柵などもない。スケーターが持ち込んだ大小のカーブボックスやコーンなどのセクションが植え込みの合間に複数置かれている。これらは自由に移動させて使用することができるが¹⁷、アクションスポーツを行うための施設にするために特段の設備投資は見られない。そのため、特に子どもの遊技・競技環境としては「駐車場」であることと「路面」の2点が大いに課題となっている。

② 駐車場であること

「東和田」は、当該施設を管理するスポーツ課よると駐車場の扱いである。野球や陸上などの大会開催時には、駐車場としての利用が優先される¹⁸。このために、スケーターは、各種大会を把

¹⁵ 長らくスポットとして活用されてきたため、地元のスケーターからは一目置かれている。初心者の利用もみられるが、オーリーやショービットなどをコンビネーションで繰り上げながら滑走する中・上級者が主に利用している。

¹⁶ ここには、長野市の寛容性やスノーボードをはじめとする横乗りスポーツへの理解ある地域性が伺える。

¹⁷ 長い時間をかけてここを利用してきた地元のスケーターの努力と粘り強い交渉によって、このアクションスポーツ広場の使用が実現したのであろう。各地で続いているこうした努力はスケートボード環境の発展・向上には欠かすことができないのみならず、ともすれば粗暴な烙印を押されることのあるスケーターが民主的な活動と手続きを経て都市空間の中に遊びの場を獲得していくプロセスとしても非常に重要であらう。

¹⁸ 高校野球の地区大会など長期間に渡り使用ができない場合は「北レク」など他のパークの利用を余儀なくされる。

握しながら、利用できる日を推測しながら「東和田」を利用する必要がある。

一方、スケートボードをしない一般市民にとっては、長野運動公園総合運動場のHPをはじめ公的文書にはアクションスポーツ広場は掲載されていないため、「東和田」は駐車場である。駐車場の利用者の中には、この場所がアクションスポーツ広場であることを知らず、他に駐車スペースが空いているにもかかわらず、アクションスポーツ広場に駐車する者がいる。特に南パーキングの利用者の数が増えると、アクションスポーツ広場側への駐車が徐々に始まる。乗用車への接触を避けて滑走する必要が生じるほか、混雑状況によってはその日その時になってスケーターは利用を取りやめざるを得ない。

つまり、「東和田」では、駐車状況に応じて、滑走への安全配慮や中止などの対応について都度都度判断し、対応をとる必要がある。大人であればある程度、状況に応じて折り合いをつけることもできよう。しかし、楽しく遊び始めた子どもはどうだろうか。状況を見て滑走が「迷惑」になるため「やめる」という判断を速やかにできるだろうか。また、子どもが、駐車場内を自動車が移動するなかで滑走すること自体、子どもの遊び空間として適切であるかは非常に大きな疑問が残る。

また、「東和田」には柵が設置されていないために、散歩を楽しむ地域住民が滑走者のいるアクションスポーツ広場を横断することがある。距離は保てているとはいえ、自転車と同程度かそれよりも早い速度で滑走している際に、転倒した場合、スケートボードが飛んで歩行者に接触することは当然予測され、打撲では済まないケースが起こりうる。にもかかわらず、利用のルールとマナーを示した看板には、「当施設内で起きた事故については、一切の責任を負いません」と掲示されている。最低限の事故に対する環境整備がなされないなかで、自己の責任を利用者に負わせることは適切であろうか。特に、道路での滑走を避けて、遊びにやってきた子どもを想定したとき、安心して滑走できる環境整備がされているとは言い難いであろう。

「東和田」においては、自動車・通行人への加害や接触などによる被害を生じさせないために、アクションスポーツ広場としての専用化と区画への仕切りの設置が急がれよう。

図表3 長野運動公園総合運動場のアクションスポーツ広場の様子



③ 安全滑走の妨げとなる路面

図表4の写真は、「北レク」（右側）と、「東和田」（左側）のそれぞれの路面の様子である。予算を計上し専用施設として設営された「北レク」の路面は、コンクリートできていて、路面の凹凸は少なく滑らかである。コンクリート製の複雑な形状セクションが複合的に配置されているとともに、フラット面がところどころに配置されている。

一方で、「東和田」の路面は、アスファルト合材できていて、全体的に合材の砂利や小石による凹凸が見られる。写真では確認しにくいものの、ところどころ雑草、落ち葉、枝がある。路面には無数の亀裂や2センチを超える大きな割れ目があり、経年劣化したアスファルトの小石がはがれて転がっている。また、水勾配が駐車場の中央から端へと、同時に全体に西側に向かって傾斜がつけられている。

スケートボードのセッティングによっても影響が異なるが、凹凸の多い路面での滑走するには相応のテクニックを必要とする。最も手に入りやすいストリート用の小さなウィールは、安定性が低く、小石を超えるためにより大きな力を要し、ある程度の速度で滑走できない場合、つまずき、転倒に至る。また、地面の割れ目にウィールがはまると、慣性力によって体だけが進行方向に運動するため、転倒が生じやすい。整備された路面向きの硬いウィールでは、凹凸による振動を吸収しづらく、デッキのコントロールが難しくなる¹⁹。

また、ある程度の速度で滑走してバランスが保てるようになるには、滑走中にスピードや進行方向をコントロールする技術が必要である。傾斜地では思わずスピードがついてしまうことがあり、コントロールのできないスピードで滑走すると、より転倒しやすく、転倒時のより大きなケガにつながりやすい。

図表4 北レク（右側）と「東和田」（左側）のアクションスポーツ広場の路面の比較写真



¹⁹ セッティングにより滑走しやすい路面やスタイル、競技への適正などが変わる。

ところで、東京2020オリンピック以降のスケートボード人気により、転倒事故による医療機関に寄せられたケガの報告の増加と、そのケガの半数近くが骨折などの重大なケガであることから、消費者庁がプロテクターの着用や滑走場所の選定を呼び掛けている。HP上には「禁止された場所や車・人通りの多い道路では滑走しないでください。路面の凹凸や傾斜、濡れ、障害物がない、平らで広い場所を選びましょう」と掲示されている。これまでに延べてきたように、実際には、許可された場所が非常に限定的である上に、その許可された場所そのものが路面の凹凸や傾斜となっており、必ずしも安全とはいえないのである。これでは滑走技術が伴わないスケーターは滑らないでください、安全に滑れる場所はありませんと警告しているのと同義であろう。

「東和田」は、滑走スキルを持った、状況に応じた判断のできる大人のスケーターにとっては、練習場所として十分に機能する。他方で、スケートボードを始めたてで、地面を蹴ってデッキに乗るプッシュや、デッキを左右に振りながら自走するチクタク、重心移動で方向を変えるカービングやターン、片足のかかと部分を地面にこすり合わせながら速度を落とすブレーキングといった基礎的な滑走技術が身についていない場合、転倒のリスクの高い危険な練習場所と言わざるをえない。特に地面をける力が弱い子どもにとっては、疲労の蓄積を生みやすく、転倒リスクの高い凹凸の多い路面での滑走は遊技環境として適切とはいえない。安全な滑走環境の整備に向けて、路面の塗りなおしといったことが求められよう。

（4） 南長野運動公園のアクションスポーツ広場

① 施設概要

南長野運動公園（以下「南長野」）は、長野オリンピック開閉会式場として使用されたスタジアムとその周囲を整備してして作られた地域総合スポーツ空間である。公園内には、マシנגジム、温水プール、スタジオ、アリーナ、野球場、テニスコート、AC長野パルセイロホームスタジアム等が整備されている。

図表5は、「南長野」「南」「オリスタ（オリンピックスタジアムを省略）」などと呼ばれる南長野運動公園のアクションスポーツ広場の様子である。「南長野」は、北小森交差点に最も近い、南西の駐車場の南側の一角を柵によって仕切り転用した施設である。愛好家が持ち込んだ大小のカーブボックスやコーンなどのセクションが配置されており、これらの設置・維持などを愛好家自身が担っている。右上の写真からは看板に「長野市教育委員会体育課」「公園指定管理者」が併記されており、危険であることを明記しており、アクションスポーツの利用以外での立ち入りを禁止が明示されている。他方で、柵を除くと、アクションスポーツを行うための施設にするために特段の設備投資が行政サイドによって投下された形跡はあまりみられない。

図表5 南長野運動公園のアクションスポーツ広場の様子



② 路面とパーク面積

「南長野」は、「東和田」の路面同様に、アスファルト合材でできており、全体的に合材の砂利や小石による凹凸が見られる。写真では確認しにくいものの、やはり雑草、落ち葉、小枝、アスファルト合材の小石があると同時に、路面には複数の亀裂や3センチを超える大きな割れ目がある。大きな亀裂については、左下写真のように一部に補修がされた形跡が見られる。

こうした亀裂は、スケートボードでトリックを繰り返しながら飛び越えるギャップとして機能的な個所もあるものの、セクションに入る手前やセクションから出る箇所にできているものもあり、全体的には転倒リスクの高い状況が生じている。

「南長野」の380㎡に近いパークとしては、ムラサキスポーツが運営するムラサキパーク大阪東岸和田があげられる。ムラサキパーク大阪東岸和田で開催される所属ライダーやプロスケーターによる初心者向けのスクールは10名の生徒にパークを貸し切って行われる。経験豊かなスケーターかつレッスン経験の豊富なスタッフが指導にあたっても、安全性や習得に必要なアドバイスなどができる広さ、適正人数はそう多くないことがわかる。300㎡で10人は一方向への滑走の指示などを含めて、プロだからこそ安全に滑走させられる人数であると考えれば、未経験者が縦横無尽に自己責任で滑走することを想定すると「南長野」の利用人数はそれよりも少なく抑えられる必要があるだろう。

実際には3～4人で滑走する場合であっても、一人ずつ順番に滑走するか、異なるライン取りで2人が滑走してほかは休んでいるか、端で止まり技の練習をするなどの滑走面の使い分けが求められる。互いに滑走ラインがわかっているような場合は、より多い人数で滑走することもできる。しかし、転倒時にデッキが飛ぶなどして他者を転倒させるなどのリスクの高い滑走は、始めたばかりの初心者がいる中では控える必要があるであろう。

（5）環境整備に向けて

以上のように、長野市内のスケートパークは十分にスケート人口に対応しているとは言い難いものの、かなり早い段階で長野市は滑走場所の確保に向けて愛好家との協力関係を気づいてきた先行事例だと考えられる。「東和田」や「南長野」のスケーターのなかには、「北レク」の開設に寄与した者もあり、急ごしらえのパークであったとしても、街路で滑らざるを得ない状況から滑走場所が確保されることはルールを守った滑走へのシフトにとって非常に重要なプロセスとなりうる。

環境整備については、面積的な確保がいまだ不十分ななかで、既に茶臼山のプール施設の転用が決定されている。しかし、それだけでは、遊技人口に対して十分とは言い難く、既存の転用型施設においても、柵の設置検討、路面の整備などを進め、特に、子どもたちにとってアクセスのよい場所で、安全な遊技環境の整備を進めていくことが求められよう。

また、面的広がり確保はもちろんのこと、滑走スキルに応じた滑走場所の提供を視野にいれ、休日の学校施設利用の検討や、「南長野」のような小規模パークの複数設置など戦略的に子どもの遊技・競技環境を整備していく必要がある。

IV 結びに代えて

本稿では長野県内の一部のスケートボードパークを対象に参与観察・観察調査より得た知見でまとめた。オリンピック 2020 以降、全国に屋外型、屋内型と様々な形態のスケートボードパークの整備が進められている。

しかし、スケートボードの経済効果、公園の整備状況について需要性とそれに応じた供給性が十分に果たされていないように考えられる。スケートボードが誰もが親しみ生涯スポーツとして遊技、競技をしていく中でそれを行う場所が十分ではない。日常でスケートボードを楽しむ光景をニュースの特集やドラマ²⁰の中で見ることも多くある。また公園などで親子の微笑ましく遊戯の様子、駅前広場で技術が十分ではない若者が利用者（歩行者等）を無視して我侔顔で遊技する等、様々な景色がある。

スケートボードの利用が禁止（図表 6）されていることを認識しての行為かはわからない。もしくは、道路で滑ることができないので広い広場で滑るものもある。様々な場所で滑走をするが、凸凹道や段差があることで技術を伴っていなければ、単独事故、他人を巻き込む事故（事件）につながりかねない²¹。

例えば滑走によって毀損されることでその場所がそれを許されると誤解を生み、更なる無秩序を生んでしまう。割れた窓を放置、落書きを放置することで誰もがその場所であれば行ってよいと誤った認識に繋がる。すなわち、周囲の者が関係ないとする事でその場所の治安の悪化につながっていく。事件事故が多発することで、その場所にマナーを守らずに逸脱した遊技・競技者を寄せ付けてしまわないように、取り締まりももちろんのことであるが、住民の意識も必要となる。

²⁰ 日本テレビ パンドラの果実～科学犯罪捜査ファイル～（第5話）

²¹ 横浜市「市民の声」の公表 <https://cgi.city.yokohama.lg.jp/shimin/kouchou/search/data/32006574.html>（最終閲覧日：2022.8.1）、堺市「市民の声」
<https://www.city.sakai.lg.jp/shisei/koho/kocho/shiminokoe/h31/r010531/5.html>（最終閲覧日：2022.8.1）

2024年佐賀県で行われる国民スポーツ大会²²、全障スポーツ大会²³が実施される。スケートボードは唐津市で行われる。競技方法は、「前後に車輪がついた板に乗り、街にあるような階段や手すり、などを模したセクション（構造物）を使いながらさまざまなトリック（技）を繰り出します。そのトリックの難易度や高さ、スピード、オリジナリティ、完成度、全体の流れを見て審査員が採点します。²⁴」と説明されている。これにより全国においてスケートボードパークなどの専用、兼用スペースが増敷されることを期待し、これにより事件や事故、マナー違反が減ることを願いたい。

図表6 禁止の看板（横浜市内）



横浜市内の駅前広場に掲示された「スケートボード禁止」の看板（2022年8月15日、小関撮影）

今後の研究の中では、その地域の若者文化と、地域性（天候、交通整備状況）などより参与観察・観察調査を行っていきたく考えている。

参考・引用文献

- 朝日新聞デジタル「市民プールをスケートボード場に衣替え 五輪人気で長野市（遠藤和希 2022年2月17日）」<https://www.asahi.com/articles/ASQ2J6V5ZQ2HUO0B00C.html>（最終閲覧日、2022.7.27）
- 上総更科公園『「スケートボード教室」参加の手続きについて』
<https://www.kazusa-sarashina.com/tmp/pdf/1634693248.pdf>（最終閲覧日：2022.8.10）
- 一般社団法人 日本スケートボード協会『よくある質問集』<http://www.ajsa.jp/info/q-a.html>（最終閲覧日：2022.7.28）
- 長野市「アクションスポーツ広場のご案内」https://www.city.nagano.nagano.jp/sos_hiki/sports/89188.html（最終閲覧日：2022.7.28）

²² スポーツ基本法の一部を改正する法律（2018 成立/2023 施行）により 2023 年より「国民体育大会（国体）」が「国民スポーツ大会」へ名称が変更された

²³ 佐賀国スポ公式サイト <https://www.saga2024.com/>（最終閲覧日：2022.8.10）

²⁴ https://www.saga2024.com/carry_out/kokusupo#Skateboard（最終閲覧日：2022.8.10）

NPO 法人日本スケートパーク協会『2022 年日本全国スケートパーク総数調査報告』

[https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2022/06/db05c8487435dbc44e6aa412f3c3](https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2022/06/db05c8487435dbc44e6aa412f3c37e22-1.pdf)

7e22-1.pdf（最終閲覧日：2022.6.11）

——『2021 年日本全国スケートパーク総数調査報告』[https://www.jspa.or.jp/wp-](https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/fea6143ab4bb2a43640498ebb1aea2b5.pdf)

[content/uploads/2021/06/fea6143ab4bb2a43640498ebb1aea2b5.pdf](https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/fea6143ab4bb2a43640498ebb1aea2b5.pdf)（最終閲覧日：2022.6.11）

——『国内スケートボード利用者数推計と今後の動向』[https://www.jspa.or.jp/wp-](https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2017/06/a726105b75ff618eb8a3bbff1fd349ce.pdf)

[content/uploads/2017/06/a726105b75ff618eb8a3bbff1fd349ce.pdf](https://www.jspa.or.jp/wp-content/uploads/2017/06/a726105b75ff618eb8a3bbff1fd349ce.pdf)（最終閲覧日：2022.6.11）

太田幹也・佐藤充宏（2020）「都市公園行政におけるスケートボード専用のパークマネジメントについて：鳴門市の地域開放施設『UZU パーク』を事例として」『地域科学研究』10，25-37.

笹川スポーツ財団『スポーツライフに関する調査報告書』

https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/baseball_0018.html（最終閲覧日：2022.7.28）

消費者庁『スケートボード類での事故-転倒することを前提に安全保護具の着用と場所選びを』

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/caution/caution_056/（最終閲覧日：2022.7.28）

高橋豪仁（2011）「スポーツ欲求から公共性へ」『スポーツ社会学研究』19（2），33-48.

田口由大（2020）「KANSAI2025 関空対岸に PFI 公園 11 万 m²を整備・運営：泉南りんくう公園」『日経コンストラクション』749，68-71.

鳥居一郎（2019）「火打形公園スケートボードパークの取り組みについて」『公園緑地』80（2），30-31.

鳴尾茉樹（2008）「姫路市におけるスケートボード広場の形成過程：若者が体験した『都市の政治』」『地理科学』63（2），66-79.

松本優希（2019）「公共空間における社会的排除とライフスタイルスポーツ」『人文地理学会大会研究発表要旨』2019（0），48-49.

矢部恒彦（2009）「東京都の公園におけるスケボー場所の調査研究-スケボー活動場所に関する研究（その1）」『日本建築学会計画系論文集』74（635），185-192.

矢部恒彦（2012）「スケーター達による公園広場の流用パーク化に関する事例的研究」『日本建築学会計画系論文集』77（672），409-417.

脱稿日：2022 年 8 月 15 日

受理日：2022 年 8 月 15 日

小関慶太：八洲学園大学 生涯学習学部 生涯学習学科 准教授

小松仁美：清泉女学院短期大学 幼児教育科 専任講師